

## 夏の亡霊

芹沢一

死ぬほど暑い。だらしなく間延びした熱帯夜がわがもの顔で居座るこの部屋で、もう何度も先生を抱いた。息も詰まるほど淀んだ空気を吸って吐いて、なんだか温水プールにでも沈んでいるような気になって、ぼんやりと天井を見上げながら、たったひとつのこの夜が通過していくのを実感する。この街のこの季節はこんなにも気怠いものだったのか、という新たな発見。ちょうど今履いているパンツの伸びきったゴムみたいな、爪先のところが破れた靴下みたいな。毎日毎日飽きもせず、ダルイ、ウザイ、シネを繰り返して生きる馬鹿な学生、その馬鹿が夏に伝染して蔓延している。

シングルサイズのベッドに横たわったまま先生が動かないから、ちよつと冷蔵庫から飲み物を拝借しようとしたら、脱ぎっぱなしだったティーシャツを投げつけられて手を止めた。流行っているらしいダサイティーシャツを真顔で着て、毎日不特定多数の人間に対して死ぬばいいのと言ひ

続ける馬鹿な学生のひとり、それが自分の正体だったのだと、その衝撃でふと思ひ出したりした。陽炎みたいにゆらゆら揺れてそのまま消え入ってしまいたい熱帯夜、やけに喉が渴いて、飲み物を探す以外にすべきことを見つけないのが難しい、そんな夜。一年前に聞いたおさがりのテレキヤスターの雑音、リフレイン。

振り返って、先生が凄い顔をしてこつちを睨んでいるのが見えたので思わず目を逸らすと、ダンボールがいくつも積み上げられているのが見えた。模様替えなんて、こんなもとかから何も無い部屋なのにどう飾ったって同じじゃん、と言うと先生は更に怒ると思ったので、何も言わずに頭の後ろの方を搔いた。

「なんで怒ってるの」

「ここは私の部屋で、それは私の冷蔵庫。勝手に漁らないで」

「は、水がもつたいたいか言うわけ。ケチくさ」

「ああもつたいたない。アンタにやるくらいなら、どっかの辺りのドブ猫にでもやるわ」

だから、今すぐ冷蔵庫を閉める。

「は、機嫌悪いね」

「良かったことなんてなかったと思うけど。済んだんだからさっさと帰って」

「はいはいわかりましたよつと。うっぜ」

ベッドの上、うつ伏せた先生の、額を覆う前髪の隙間から見えた鋭い視線、かち合って、逃げ場がないような気がしたから、背後に逃げ場を探したけど、背後は冷蔵庫に詰められていてもう諦めた。

ぎろり、と睨みあげられて、汗をかいていたことを思い出した。違う、そんなんじゃない、もっとこう、この部屋と本心を包み込む気怠いまどろみに針の先ほどの穴を開けるチャレンジとか、そういうことをしたかったのに、結局いつもこうだ。そろりと向けた視線の先のダンボールからする嫌な感じと、それが喚起する縋りつきたいような心細さ、切なさに蓋をしたくて、先生の目を見ながら冷蔵庫を開けて、ミネラルウォーターのペットボトルに口をつけてやった。

「ほんと、嫌になる」

「そりやどうも」

「ねえ、ほんと、早く帰って。明日忙しいんだから」

「なんで」

「なんで、ね。逆に訊くけど、なんでアンタに教えなきゃなんないわけ」

「じゃあ教えてくんなくていいっての。ほんとうぜえ」

「一生言ってたらしいわ」

先生はとても綺麗な人だったが、こうしてあらゆるものが滲んで揺らいでいるような熱帯夜の中では、汗ばんだ丸っぽい額やその近くの皺の寄った眉間にばかり目がいつてしまつて、昼間見るのとは全く違う顔に見える。先生はいつも、数学はいかに綺麗に問題を解くことができるかによって得意か不得意かが分かると言っていたのを思い出して、きつと今なら、先生より先生が解いた数式の方がずっと綺麗だろうと思つた。不毛。だつて数学は中学生の頃からずっと苦手だったから。先生は途切れた数式を見て、センスはあるから頑張つてみよう、と励ましてくれたけど、そのせいで数学が最も苦手な教科になつてしまつた生徒がいることを知っているのだろうか。知っているわけがない。だつて、そんなことを先生に話したことはない。

髪の生え際の辺りに滲んだ汗が眉間を流れていった。ぼたりとフローリングに落ちて、ほんの少し跳ねた。

「なあ、なんなの、このダンボール。模様替えでもすんの」

「ほっとけって言ってるの」

「だって気になるし。先生いつも言ってるじゃん、気になることは遠慮せず質問するように、って」

俺以外の生徒には、と取って付けたのが聞こえたのか、ますます不機嫌そうに顔を歪めて、ベッドの上で頰杖を着いた。服を着るのも億劫なのか、ベッドに転がったまま動こうとはしなかった。

苛烈。先生の視線から、本当に嫌っているのが伝わってくるから、その視線に耐えかねてさつきからダンボールばかりを見ている。

「引っ越すから。明日」

「引っ越す」

「そう、引っ越す」

ただ繰り返しただけの言葉を拾って、先生はもう一度、言い聞かせるように大事そうに、でもどこまでも軽やかに吐き捨てた。言葉の端が浮ついていて、心からせいせいし

たみたいな言い方だったから、思わずなんで、と突っかかったら、先生はなんで、と確かめるように呟いて、それから声を上げて笑った。茹だるような熱に犯された脳みそがぐらぐらと揺れて、これは眩暈なのだと思づくのにも随分と時間がかかる。

「なんで、ね。分からないんだ」

「だって、そんないきなり」

「いきなりじゃないの、全然いきなりなんかじゃない。本当は、ずっと前から引っ越したいと思ってたから」

「なんで」

「本気で分かってないの」

「分かるかよ、言われたこともないのに」

「アンタに言ったって無駄だって思ったから言わなかっただけ」

「それで分かれて言う方が理不尽な話じゃん」

「逆に分かんないのが不思議でたまらないけどね。分かりやすい話でしょ。それこそ、アンタが私を組み敷くのと同じくらい簡単なこと」

ふ、ととっかかりを作るように先生は笑った。

「クビになったの」

その言葉には心当たりがありすぎて、一つに絞り込むに  
はどうにも骨が折れそうだったけど、全身が空中に縫いつ  
けられたみたいに固まったまましばらく動きそうにはな  
かつたし、時間に置き去りにされたこの部屋だし、時間は腐  
るほどあると思つたから、口を開かずに考えて考えて考え  
て、考えがまとまりかけたところで曲にならないテレキャ  
スターの雑音が全身に立体的に貼り付いたような感じにな  
つて、結局はわけがわからなくなつてしまつた。ただ、先  
生が引越す、先生が学校をクビになつた、その二つの結  
果だけがしめっぽい熱帯夜の中でほのかに光を放ち、今、  
視覚と聴覚の両方からとんでもない嫌がらせを受けている。  
引越しておいくら万円かかるんだろうとか、今日はラ  
グが取り払われてフローリングがむき出しになつているけ  
ど、フローリングのあの、長細い板の集合的デザインはな  
ぜそうなつているのかとかについて考えて、そんなことは  
どうでもいいんだと勝手にわれに返つたりした。先生がこ  
の部屋を出てどこかへ行ってしまふのだという予兆をあち  
こちから感じる。先生は苦労とかそういう胸の中心に溜ま

る系のネガティブな何かを普段からおくびにも見せないか  
ら、俺とは決定的に作りが違ふ生き物で、その違いは男と  
女の違いというか、そういうものなんだろうと思つていた。  
「アンタさ、私のこと散々友達に紹介してくれたらしいじ  
やない？ そりゃクビにもなるわつて話。私が学校の偉い  
人だつたら、つてまあそんなことはこれから一生ありえな  
くなつたわけだけど、生徒と寝て平気で授業できるような  
教師置いときたくないし、つていうか普通に犯罪だし、あ  
あ、きたか、つて感じ」

揺るがない。先生はいつだつて、優しそうに、綺麗に笑  
つてみせるのに。寝そべつたままだからなのかときどき掠  
れる先生の声は、普段はもつとみずみずしい感じで、形を  
確かめるように柔らかく数式を説明していたような気がし  
たけど、今の先生の声こそが本質的に先生の声なのだと思  
え直すことにしたら、先生の声がアレなものには諦めがつい  
た。おさがりのテレキャスターを初めてこの手で持ち上げ  
た瞬間、その重さに言いようもなくがっかりしたときのあ  
の感じに似ている。どうやったら弾けるのか一つも分から  
なくて、でもテレキャスターはとて重くて、その重量感

はあんなに欲しくてたまらなかつたテレキャスターから一切の魅力を奪っていった。冷房をつけたい。さむ、とか先生が言いだすくらい冷房を強くして、この部屋の凝り固まった空気を揉みほぐしたい。立ち上がってエアコンのリモコンを探していると、先生がなにしてんの、と言ったから、エアコンのリモコンは、と返すと、もつたいない、あ、でもエアコンのリモコンっていうコンコンうるさい感じはちよつと笑える、と言われた。どうせもうすぐ出ていくんだから、最後くらいエアコンつけたっていいじゃん、と言うと、先生はそれもそうね、と納得していた。続けて、何も言わなかつたの、と言うと、一瞬の間を置いて先生は吹き出した。

「言つたつて無駄。私に直接話がきたつてことは、もうどうしようもないところまで進んでるつてことだから。どうあがいたつて覆らないの」

「でも、言いたいことはあつたんじゃないの」

「なに、アンタビビつてんの。心配しなくても、何も言つてないから安心して。せいっぱい神妙な面持ちで一応の否定はしておいたから。そんな事実はありません、つて言

つてもまるで信じてもらえなかつたけど。火のないところに煙はとか言つちやつて、まあ、よくない噂が流れている、生徒との交際は実にけしからん、みたいな感じで言われたし、扱いは自主退職だから全部が全部バレてたわけじゃないみたいだけど」

「別にビビつてるわけじゃないし、なんか、先生も大概バカだよ。我慢するとか、なに、もしかしてそれ俺のためなの」

「は！」

は、は、と自分の笑い声一つ一つを確認するように、先生は丁寧な笑つた。なんだかぞつとした。先生は最近いつも機嫌が悪いけど、今日はいつもよりずつと機嫌が悪いのだと気づいた。

「アンタのため！ 本気で！ 本気で言つてるのそれ！ そんなわけないでしょ！」

いい、よく聞きなさい。私はね、大人なの、アンタと違つて。

ぎろり、と睨みあげられて、本当に、心から、全力で嫌われているのだと実感する。先生の背後に、せき止められ

ていた時間のすべてが絶世の美女を装って佇んでいるから、なにそれ、と発しようと思った言葉は喉の奥の方で気管支に焼きついて、なにこれ、な状態だった。言葉になり損ねたなにこれ、が脳みその方の上がってきて、ぐわんぐわんと脳内を駆け回るから、それに合わせて視界がふらふらと安定しない。眩暈。世迷。そんな状態なのにお得意のうぜえ、はすなり口から出てきたからますます不思議で、なんだから無性にハンバーガーとかを食いたい気がする。暑い。

「なんだってね、言葉にするのは簡単。アンタみたいに毎日毎日ダルイ、ウザイ、シネって繰り返して生きるのはいくらも簡単なこと。私だってどん底だったとき、死ぬのたった一言で人が死んだらどんなに楽が一時間くらい考えてたことがあるし、純粹な死ぬ、って言葉でアンタをぶちのめしてやりたかった、っていうか手近な鈍器でぶん殴ってやるうかと思つて、実際かなりスレスレだったけど、本当にそうすることはしなかったの。分かる？」

「分かんないっての。だって先生肝心なこと全然言ってくれないじゃん、何が大人だよ」

「行間を読む努力をしなさい。アンタは毎日たった三つの言葉で生きてるみたいなもんだから、実際の言葉以外から何かを感じるのが難しくなるの。このままじゃどうしようもないクズになるよ。せめてお勉強くらいは人並みにできるようにしといた方がいいんじゃないの、ってわれながら親切」

「意味分かんない、うっぜ」

「は、うっぜ、ね」

ゆらり、滑らかに先生は顔を俯けた。

「じゃあ死ぬ、死んじまえ！」

死ぬ、死ぬの命令形、意味は、死ぬようにしなさい、ってこと。いつもなんの気なしに使っている言葉だけど、今だけは、その正体がよく分からない。死ぬ、シネつてもっと軽くて、するすると口をついて出る感じがイイのに、先生はどこか苦しそうに、吐き出すように死ぬ、と言ったから、そういう風に言う言葉じゃないんだよ、と教えてあげたくなって、同時に、泣きだしたくてたまらなくなった。

「子どもらしさが死んだとき、その死体を大人と呼ぶ、って有名な言葉、まあ、アンタは知らないだろうけど。私は

もう、冗談でも死ぬ、なんて言うのがつらくなったの。だって私は大人だから、子どもに死ぬって言うのがどういふことか知ってる。言葉にするのは簡単なはずなのに、色んなことがもの凄いい力でそれをせき止める」

だったら先生は、時間からはみ出して止まったままの俺に向かってなら、いくらでも、気が済むまで死ぬって言ったって構わなかったのに。いくら死ぬと言われたところで時間が止まっているのだから、死ぬことはないし痛くも痒くもない、はずだったけど、今、実際に死ぬと言われて頭の中が大変なことになっている。やっぱり先生が大人でよかったのかもしれない。

一年前、この部屋で先生を抱いたとき、泣いていた先生の顔と俺の顔の間、真ん中で、確かに時計のネジが弾けて飛んでいったのだ。ネジを探しにこの部屋に来て、先生を抱いて、動かなくなった時計を目の前に突きつけられて、次第に針まで歪んでいった時計、でも、その時計とももうお別れ。ネジは結局見つからないし、先生からももらったテレキヤスターは弾けないまま。この部屋と本心を包み込む気怠いまどろみに針の先ほどの穴を開けるチャレンジの失

敗と、それに付随する痛みを伴った感傷、この部屋に置き去りにしてきたものを一つ一つ振り返って思い描いてみて、つまり、先生のことかどうしようもなく、死ぬほど好きだったのだと気づいた。忘れたくはないし、手放したくはないし、手放しにそれらを愛でることができる日の到来を、停止したまま待ち続ける。

「まあ、もう今更だけど。アンタと会うこともなくなるかと思うとね、職を失ってバカ高い引越し代取られようと、そんなの全然惜しくないの。写メはもうどうだっていいから、見せびらかすなりなんなりすればいい。もう関係ないの、何もかも」

乱暴に髪をかきあげて、先生は今日初めて、嬉しそうに笑った。

「なあ、先生」

「なに」

「連れてって、俺も、お願い」

「どうとうイカレタの、かわいそうね」

「責任取ってよ、俺、このままじゃずっと子どものままだ。」

先生が止めたんだろ、俺のこれから、全部先生がせき止め

て背負ってるから、俺は、ここにそれを取り返しに来てたのに、そんなのってあんまりじゃんか」

「なにそれ、心当たり全くないし、もし私と何もなかったとしても、たぶん、アンタはずっと大人にはなれないと思うけど」

「そういうことじゃなくて、違う、うるさい、死ぬ、と言おうとしたら、言葉が言葉にならないあの現象が再び襲いかかってきて、なにこれ、なんだこれ、な状態。先生はいつただれだけ奪っていくつもりなのだろう。あの軽やかですらすらと出てくる死ぬ、シネまで連れ去って、どれだけ苦しめるつもりなのだろう。漫画の吹き出し的に空中にたゆたうダライ、ウザイ、シネ、毎日飽きもせず繰り返してきた言葉まで奪われて、ああ、俺の中の子どもらしさは息絶えてしまったんだなあ、やっぱり先生のが好きだったんだなあ、と実感する。」

「先生、たぶん俺、先生のこと好きだったよ」

「そうなの、残念」

「もっと、何かないの。最後なんだ」

「じゃあ、記念にもう一回言っておこうか、死ぬって」

ふ、と息を吐いて、先生は枕に顔を埋めた。衝動的に、先生が寝そべるベッドに早足で近づいて、生白い先生の背中に抱きついた。先生の全身が一瞬で強張り、でもなぜか抵抗はされなかったから、不思議に思いながらも先生の背中で声を殺して泣いた。

「ベイビーベイビー、ほんと、子どもって嫌になる。アンタは今、ひとり取り残された子どもぶって泣いているけど、いつか教師を抱いたって武勇伝みたいに人に話すときが来るの。そういう純真さ、透き通るような、虫唾が走るような、ね」

テレキヤス、大事にしてね、高かったの。

「ねえ、いつまでそうしてるの」

「せめて、出てくまでは、いいじゃん」

「重たいの、まあ、いいか、これきりなんだし」

間違えたのは一年前のあのときで、それ以来ずっと耳に残っていたテレキヤスターの雑音が、これからも猛烈な痛みでこの身体を貫けば、少しはマシになるだろう。もう上手に死ぬと言うこともできない。

たぶん、朝日が昇って先生が出ていったあとのこの部屋

に、どこかに飛んでいった時計のネジが転がっている。でも、それをはめて時計を直したところで、すっかり針が歪んでしまった時計では、大人になるための時間を積み重ねることはできない。子どもらしさはさつき先生の言葉で殺されてしまつて、その死体を先生が連れ去つてしまつから、これから先もずっと、大人でも子どもでもない、そんな時間の中で生きなければならぬ。地獄、地獄だ、モラトリアムなんて。キリがなくて温水プールで底なし沼で、そういうところだ。身体中に立体的に、ねっとりまとわりついて、皮膚呼吸とか、生きていくための作業が滞る。

本当は、毎日繰り返すダライ、ウザイ、シネ、なんて言葉をおはよう、おやすみ、そんな言葉で上から塗り固めるようなことをしたかったのだと気づいたけど、それこそ今更で、先生が俺について色んなことを諦めてきたように、俺は一切を諦めて手放さなければならぬ。だって、いつも夜は明ける。夜明けとともに、先生は出ていく。大切なものを全て背負つて、俺だけを置き去りにして。

さよならを噛み殺して泣いて泣いて泣いて、きつと、このときを死ぬまで忘れることはない。片時も離したくはない。

い。なんだよ、死ぬよ、と言おうとしたけどやっぱ声にはならなかったから、なんだか笑えてきた。もう、何を考えるのもダライ。

これから、さよならの度に思い出すのだ。この年の、この季節の、この日の、この夜の、このときに自分が死んだこと、先生の生白い背中、あのときまでは向けられていた温かさ、その全て。切り抜いた新聞記事みたいに克明に。夜明け前に少しは存在しているはずのわずかな光も届かないこの部屋で、わずかに残されたこの夜を貪る。

月刊缶じうす6月号 通巻189号

2013年 5月28日発行

編集人 西谷あき 渡科由太

発行所 広島大学文団BOX